

2014.7.21
新野

原科幸彦 千葉商科大政策情報学部部長



はらしな・さちひこ 46年静岡市生まれ。工学博士。東京工業大名誉教授、14年4月から現職。環境計画・政策、参加と合意形成、環境アセスメントなどが専門。

ント分野における世界の基幹学会、国際影響評価学会（IAIA）で日本人として初の会長を務めた立場から、現計画はアジア21に明らかに違反し、適切なアセスが行われていないことを指摘した。

国内のアセスは代替案比較の義務がなく、評価項目は自然環境に限定されている。だが、国際標準のアセスは自然環境だけでなく、社会環境、文化環境も含んでおり、五輪アジア21にも、その明記されている。

コンパクトで美しい五輪にするには、現競技場を日本の技術力で改修し、日本の「もったいない精神」の素晴らしさを世界に示すことである。

正しい設計条件を設定し、あらためてデザインコンペを行うべきだ。そして、着工前に国際標準のアセスを行い、国民に対する説明責任を果たすことが不可欠である。改修なら詳細設計の期間も含め、案が決まって3年で工事は終了するから、時間は十分にある。

幸い、舛添要一東京都知事は競技施設の見直しをする6月の都議会で宣言した。舛添知事が無駄をなくし、遺産を生かした美しい五輪にすることを大いに期待したい。

ールで選ばれたのは15区も持続可能な開発を求めの高規格の地区に、70区という巨大な施設を建て替える前提として行設する計画である。費用は当初3千億円、抑えて

無駄をなくし 美しい五輪に

も1700億円で、先の改修案との差は約1千億円にもなる。

周囲の景観とデザインの不調和と環境破壊、そして何よりも、明らかな

国費の無駄遣いに著名な建築家、槇文彦氏が異論を唱えた。今では、日本建築家協会など建築界のほとんどが反対の意思表示をしている。これが将来に禍根を残すのは明らかだ。

今は、あるものを長持ちさせて使う時代であとして、6月初めに手紙を送った。環境アセスメント分野における世界の基幹学会、国際影響評価学会（IAIA）で日本人として初の会長を務めた立場から、現計画はアジア21に明らかに違反し、適切なアセスが行われていないことを指摘した。

国内のアセスは代替案比較の義務がなく、評価項目は自然環境に限定されている。だが、国際標準のアセスは自然環境だけでなく、社会環境、文化環境も含んでおり、五輪アジア21にも、その明記されている。

既存施設の改修望む

それは、競技場は既存施設の活用に最大限の努力を払い、どのような改修をしても対応できない場合に限り新設するとしている。現在の国立競技場は、まだ築五十数年、改修で対応した欧州の多くの競技場に比べ、若い。実は、日本スポーツ振興センター（JSC）が、外部に依頼してつくった改修計画も既にある。

にもかかわらず64年東京五輪の貴重な遺産である現競技場を壊し、巨費を投じて巨大な競技場を建設しようとしている。東京への誘致が決まる前に実施した国際コンク